

# 読書の量と質を保障するロシアの文学教育

折 川 司

## 1 はじめに

毎日新聞が全国学校図書館協議会の協力を得て実施している「学校読書調査」には、調査開始以降のおよそ35年間に亘って、日本の中学生の読書量が低迷し、不読率が高い水準を維持してきたことが示されている。1 か月間の平均読書量は $2.0 \pm 0.5$ 冊、不読率もまた $40 \pm 10\%$ という極めて狭い範囲で推移しており、ある意味安定した35年間であったといえる。

ところが、中学生の読書量と不読率の数値は、2003、2004年辺りから急激に動き始め、読書量は4.5冊（2017）に、また不読率は12.7%（2010）に至るなど、大幅な伸びが確認されている。こうした劇的な改善は、読書推進活動に邁進してきた関係者たちの長年の努力の結実と言え、読書という営みや活字文化に対する再評価の表れとも捉えられる。しかしながら、拙稿<sup>1)</sup>において明らかにしたように、読書量と不読率の改善がある年に突然発生し、その好転が現在も継続していることや、改善のタイミングと「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画」の策定（2002～）とが時期的に重複すること、そして特に、「子どもの読書活動推進に関する基本的な計画」の中で全校一斉読書が具体的に要請されたことなどの諸点を重ね見ると、その良し悪しは別として、国のリーダーシップが中学生読書の量的改善の契機となったであろうことは否めない。

こうした読書量や不読率のような量的な指標とそれらを改善することへの眼差しは、実践の成果が目に見えるために自治体や学校が向き合い易かった一方、中学生読書の質的側面の軽視を意図せず生み、それが現在新たな歪みとして教師や司書らを悩ませている。

実際、現代の中学生にとって、読書はゲームやアニメ、マンガなどと同じ地平にある娯楽として位置づけられており、手軽に素早くストーリーを追えるライトな作品とその読書に彼らの目は向いている。およそ半世紀前と比べ、「読書対象」「読み方」「読書観」は大きく変化し、中学生読書の質的低下・質的衰退が深刻な域に達していることは、拙稿<sup>2)</sup>に整理してきた通りである。今後の日本の読書推進活動は、現在の量的に飛躍した状態を保ちながら、質的な側面については確実に軌道修正をしていく必要がある。

本論においては、文学作品やその読書行為を重視しているロシアの教育に着目する。そして、ロシアの教師や子どもたちが、どのような作品とどう向き合っているのか、また読書というものをどのように捉えているのかについて確認整理する中で、

日本の中学生読書の質を保障するための示唆を得たい。

## 2 基礎普通教育における「文学」

### (1) 分析的思考を鍛え日常の読書行為を豊かにする「文学」の授業

ロシアにおいては、初等・中等教育を計11年間で行っている。最初の4年間が初等普通教育（1～4年生）、次の5年間が基礎普通教育（5～9年生）、最後の2年間で中等普通教育（10～11年生）と区分されており、一般的には、それら3段階の教育がシュコーラ（школа）と呼ばれる公立の教育機関において一貫して行われている<sup>3)</sup>。本論において踏まえている日本の中学生と年齢的に合致するのは、基礎普通教育を受けている7年生から9年生までということになる。

普通教育においては、それぞれの課程の連邦国家教育スタンダードに基づいて科目が設定されている。科目群の中で日本の国語科と内容的に近いのは、言語科目としての「ロシア語」と哲学や倫理などの要素も内包する「文学」である。前者は、文法の理解や綴りの練習、語彙の拡充などを基盤とする言語習得とその実践活用に関することが学習の中心となっている。一方、後者は、文学作品と様々な関連テキストの分析的な読みと考えの表出を軸としており、授業スタイルを含め、表層では日本の読むこと領域の学習と類似している。

### (2) スタンダード内にリスト化されている必読作家及び作品

「文学」のスタンダードには、必読の作家及び作品が付されている。学習指導要領に示された資質・能力を育成する上で適した教材作品を教師や教科書会社が柔軟に採択・活用できる日本とは異なり、ロシアでは初等、基礎、中等の各普通教育の課程の授業において、どの作家の、どういった作品を、いくつ取り上げなければならないかについて連邦教育省が具体的に指定している。

基礎普通教育の「文学」のスタンダードには、下に示したように必読作家及び作品がリスト化されている<sup>4)</sup>。リストの前段には、「示された作家・作品はロシア連邦の基礎普通教育の必修内容であること」と「全ての文学教育プログラムに該当するものであること」という記載があり、指定されている全ての作家・作品を授業の中で確実に扱わなければならないことが明示されている。

<b>ロシア民間伝承</b>
ロシア民話（魔法使い、日常生活、動物についての物語） 民謡、なぞなぞ、ことわざ、閑話 古代ロシア英雄叙事詩のうち選択して1編（非ロシア語・母国語学校では省略・短縮してもよい）
<b>古代ロシア文学</b>
「イーゴリ遠征物語」（母国語・非ロシア語学校では省略・短縮できる） 異なるジャンルの作品を3編選択
<b>18世紀ロシア文学</b>

ロマンローソフ	選択で詩を1編	フォンヴィージン	喜劇「The Minor」
デルジャーヴィン	選択で2編		
ラディシェフ	「ペテルブルクからモスクワへの旅」(概観)		
カラムジン	中編小説「哀れなりーザ」		
母国語・非ロシア語普通教育学校におけるロシア18世紀の文学の学習では、上記の作品の抜粋(短縮)を概観的に学習する			
<b>19世紀ロシア文学</b>			
クリロフ	選択で4編の寓話		
ジュコーフスキ			
	バラード「スヴェトラナ」		
	選択で1編のバラード(ロシア語教育学校のみ)	選択で2編の抒情詩	
グリボエドフ	喜劇「知恵の悲しみ」(母国語学校では省略・短縮)		
プーシキン			
	詩「チャーダーエフに」「賢者オレーグの歌」「海へ」「子守に」「アンナ・ケルンに・・・」(「私は奇跡の瞬間を覚えている…」)「10月19日」(「森は赤紫色の自分の衣装を失う」)「預言者」「冬の道」「アンチャール」「グルジアの丘の上に」「私はあなたを愛していた」「冬の朝」「悪霊」「雲」,「我が記念碑」その他選択で3編		
	選択でロマンチックな詩1編(母国語・非ロシア語普通教育学校では抜粋)		
	「パールキン物語」(母国語・非ロシア語普通教育学校の教育では選択で1編)		
	中編小説「スペードの女王」(ロシア語教育学校でのみ)		
	「小さな悲劇」(選択で1編の悲劇)(ロシア語教育学校でのみ)		
	長編小説「ドゥブロフスキー」「大尉の娘」(母国語・非ロシア語普通教育学校では、それら2編の長編小説は省略・短縮される。)		
	長編詩小説「エヴゲーニー・オネーギン」(母国語・非ロシア語普通教育学校では概観的な学習)		
レールモントフ			
	詩「白帆」「詩人の死」「ボロジノ」「黄色い畑が揺れる時・・・」「思い」「詩人」(「私のナイフは金色に光…」)「3本の棕櫚」「祈り」(「重苦しい人生の時に…」)「退屈で憂鬱な」「いや、私がこのように燃えるように愛しているのは君ではない…」「故郷」「預言者」その他選択で3編		
	物語詩「商人カラシニコフとイヴァン大帝」「ムツィリ」(母国語・非ロシア語普通教育学校では、この2編の物語詩の抜粋で学習)		
	長編小説「現代の英雄」(母国語・非ロシア語普通教育学校では「ベーラ」と「マキシム・マキシモヴィッチ」を学習する)		
プーシキン時代の短編物語詩			
	バラツィンスキイ, カチューシコフ, デリヴィグ, ダヴィドフ, コリツォフ, ヤズニコフ		
	選択で3人以上の作者の詩(ロシア語普通教育学校でのみ)		
ゴーゴリ			
	中編小説「ディカーニカ近郷夜話」(選択でその中の1編)「タラス・ブーリバ」「外套」(母国語・非ロシア語普通教育学校ではそれら中編を抜粋・短縮で学習する)喜劇「検察官」(母国語・非ロシア語普通教育学校では抜粋・短縮版で学習)		
	ポエマ(叙事詩)「死せる魂」第1巻(母国語・非ロシア語普通教育学校では抜粋・短縮版で学習)		

<p>オストローフスキ</p> <p>選択で1編の戯曲（母国語・非ロシア語普通教育学校では抜粋・短縮できる）</p> <p>トゥルゲーネフ</p> <p>「猟人日記」（選択でその中から2編） 「散文詩」（選択で2編）</p> <p>選択で1編の中編小説（ロシア語普通教育学校でのみ）</p> <p>チュッチェフ</p> <p>詩「トンビが舞い上がる草原から」「秋に最初にあること」その他選択で3編の詩</p> <p>フェット</p> <p>詩「夕べ」「樫の木やシラカバの下で学べ」その他選択で3編の詩</p> <p>トルストイ A. K. 選択で3編の作品</p>	
<p>ネクラソフ</p> <p>詩「百姓の子供たち」「鉄の道」、その他選択で2編の詩、選択で1編の抒情詩</p> <p>レスコフ 選択で1編の作品</p> <p>サルティコフ - シCHEDロリン 選択で3編の短編（物語）</p> <p>ドストエフスキー 選択で1編の中編小説（ロシア語普通教育学校でのみ）</p> <p>トルストイ L.N. 選択で1編の中編、選択で1編の短編（物語）</p> <p>ガルシン 選択で1編の作品</p> <p>チェーホフ 短編小説「ある官吏の死」「カメレオン」ほかに選択で2編の短編</p> <p>コロレンコ 選択で1編の作品</p>	
<b>20世紀ロシア文学</b>	
<p>ブーニン 選択で2編の短編</p> <p>クプリーン 選択で1編の作品</p> <p>ゴーリキー 選択で2編の作品</p> <p>ブローク 選択で3編の詩</p> <p>マヤコフスキー 選択で3編の詩</p> <p>エセーニン 選択で3編の詩</p> <p>アフマートヴァ 選択で3編の詩</p> <p>パステルナーク 選択で2編の詩</p> <p>ブルガーコフ 中編小説「犬の心臓」</p> <p>ゾーシチェンコ 選択で2編の短編</p> <p>プラトノフ 選択で1編の短編</p> <p>グリン 選択で1編の作品</p> <p>パウストフスキ 選択で1編の短編</p> <p>ブリーシヴィン 選択で1編の作品</p> <p>ザボロツキ 選択で2編の詩</p> <p>トヴァルドフスキ 叙事詩「ヴァシーリィ・テルキン」（その中の3つの章を選択）</p> <p>ショーロホフ 短編「人間の運命」 ブーシキン V. M. 選択で2編の短編</p> <p>ソルジェニーツィン 短編「マトリョーナの家」（ロシア語普通教育学校のみ）</p> <p>短編「いかに残念か」（母国語・非ロシア語普通教育学校でのみ）</p>	
<b>20世紀後半ロシア散文</b>	
<p>アブラーモフ、アイトマートフ、アスターフィエフ、ペロフ、フィコフ、イスカンデル、カザコフ、コントラチエフ、ノーソフ、ラスプーチン、ストロガノフ兄弟、テンドリャーコフ、シャラモフ 上記作家の中の3人以上の作家の作品</p>	
<b>20世紀後半ロシア韻文</b>	
<p>ブロードスキ、ヴォズネSENSキ、ヴィソツキ、エフトゥシヤンコ、オクジャワ。ルフツイフ 上記詩人の中から3人以上の詩人の詩を選択して学習する。</p>	



はなく、ある意味古典的な名作を子どもたちに「読ませる必要がある」「確実に与えていく」という連邦教育省の強い意思とリーダーシップが垣間見える。

単に文章の内容や表現についての質問に適切に応答するような狭い意味での分析的思考力、いわゆる文章読解力を育成する目的であれば、特定の時代や作家・作品に拘泥する必要はない。ロシアにおいては、分析的思考の強化は言うまでもなく、同時に、それ以外の面も満たすことが重視されていると推測できる。

#### (4) ロシア版「洗礼本」と育成されるロシア的読書観

スタンダードにおいて重点化されているこの時代は、およそプーシキンがロシア詩壇に登場してからの100年間であり、ロシア文学史上特別な期間と言ってもよい。プーシキンやレーモン・トルストフらを軸とする金の時代とブロークやエセーニンらによる銀の時代に挟まれて、ドストエフスキーやL.トルストイ、チャーホフのような小説家や劇作家が数多く輩出されている。ロシアの教育は、ロシア文学の黄金期に産み出された、そして長い時間をかけて国内外で高い評価を得てきた優れた作家及びその作品を子どもたちと確実に出会わせようとしている。

ロシア連邦教育科学省（現連邦教育省）において一般教育行政に携わっていたブラギーニン副部長（Алексей Благинин）は、2015年に行われた論者との懇談の中で以下のように語っている。

ロシアは偉大な文化遺産を軽視しない。確かに難解な話もあるが、文学作品は思考力を鍛えるだけでなく、教養であり、人生の指針となるものでもある。だから、そうした作家や文学作品に確実に出会わせ、対峙させている。

「偉大な文化遺産を軽視しない」という件は、リストに掲げた文学作品を読み継ぐことが、ロシア国民にとって、またロシアの学校教育において極めて重要なことなのだという認識を表している。文化遺産としてのプーシキンやドストエフスキーに触れ、その作品に描かれているものを深く理解しつつ自らの血肉としていくことが、ロシアの人々にとっての教養的通過儀礼なのだと換言することもできるであろう。越谷和子は、時代を超えて読み継がれてきた作品を「洗礼本」と呼んだ<sup>5)</sup>が、リストに掲げられている作品はまさにロシア版の洗礼本であると言ってよい。

ロシアの古典的名作には、社会的・政治的問題が反映されていたり、倫理道徳に関わる考え方が織り込まれていたり、宗教的・哲学的な命題を含むものも珍しくない。そうした作品に触れていくことが、単に思考力の向上だけではなく、思慮深く豊かに生きるために必要な教養や人生の指針を得ることに繋がるのだという捉えは、人格主義的な教養主義に基づく読書観と言ってよい。スタンダードに示された「文学」の学習目標を確認すると、筆頭に「精神的に発達した個人の養成」が掲げられ、その後に「分析的思考」や「想像力」を鍛えたり、「文学の特質に関する初歩的な概念」を理解したりするという項目が続いている。こうした配列にも、教養主義的な考え方を見ることができる。



ブラギーニンの言から滲み出た教養主義的な読書観は、2015年から4年間に亘る調査の中で、モスクワ市（及びその近郊）の「文学」の教師たちや子どもたちをはじめ、一般の市民からもごく自然に聞いている。連邦教育省が、スタンダードに包んで押しつけようとしているものなどではない。こうした読書観は、ロシア文学の発展とともに緩やかに形成され、長い時間をかけて人々の中に浸透した共通の認識であろう。読書を「極めてライトな娯楽でしかない」と考える現代日本の中学生の読書観とは明らかに異なるものである。

### 3 ボリュームある難解な作品とそれと対峙するために必要な視点

#### (1) 読書対象が読み手に要求する高次の読み

19世紀から20世紀初頭にかけてのロシア文学<sup>6)</sup>は、韻文・散文ともに重く難解なものが多い。それは10代前半の子どもたちが読む前掲のリスト内作品にも該当する。作品を正しく理解し、内容を深く読むためには、文意の把握や解釈といった基礎的な読解力に加えて、歴史や地理、民族、宗教、文学理論などの知識とそれらを読みのプロセスにおいて柔軟に活用する力が必要となる。

例えば、リストにあるプーシキンの『大尉の娘』を読む際には、プガチョフの乱に関する歴史的知識に加え、農奴制をはじめとする当時のロシア国内事情やヴォルガ流域の地理、ウクライナやタタールといった民族についての知識などを巧く適用しなければならないことはよく知られている。また、『プガチョフ叛乱史』と併せ読むことも一般的であるため、複数のテキストの情報を比較したり、重ね合わせたりする力も欠かせない。さらに、他作品やことわざに関する知識が要求されることもある。例えば、『大尉の娘』にはフォンヴィーゼンの作品が織り込まれているが、読む際には、その存在に気づき、意味や効果を掴む必要がある。こうした例は珍しくなく、クプリーンの『ルイブニコフ二等大尉』にもチェーホフの断片が織り込まれており、ブルガーコフの『犬の心臓』にもロッシーニの歌劇が引用されている。ことわざや古謡などを用いたエピソードも同様で、このような仕掛けに立ち止まることを可能とする文学的知識は軽視できない。

また、小説であれば、難解さに加えてある程度の文章量も伴っているものも珍しくない。リストを見る限り、気の遠くなるようなトルストイやドストエフスキーの長編を基礎普通教育の課程で読むことはないようであるが、比較的短いゴーゴリの『外套』であっても邦訳では文庫65ページ程<sup>7)</sup>の分量である。さらにコンパクトなガルシンの『あかい花』でも25ページ程度<sup>8)</sup>、先述の『大尉の娘』となると200ページを超える<sup>9)</sup>。日本の中学校3年教科書に収録されている魯迅の『故郷』が文庫15ページ弱<sup>10)</sup>であることから考えると、どれもなかなかのボリュームである。

こうしたボリュームのある難しい作品であっても、ロシアの子どもたちは迷走することなく丁寧に読み進めていかなければならない。高水準の読書対象によって子どもたちには相応の高次の読みが求められているということである。

## (2) 作品と対峙する視点としての問いと課題

「文学」の教科書には基本的に作品の全文が掲載され、それに読みのガイドとしての問いや作家に関する解説、併せ読むための関連テキストなどが合わさって一つの単元を構成している。そのため、どの学年のものもおおよそ大部であり、例えば Просвещение 社 7 年生用教科書（A 5 版 2 分冊）は、1, 2 巻合計で 700 頁を超える。一単元に割かれる紙幅も多く、例えば同社 8 年生教科書の第 1 巻には、プーシキンの小説を中心とする単元<sup>11)</sup> が設けられているが、それは 130 ページを超える分量となっている。授業では、別に副教科書も使用される。

このプーシキンの単元は、大きく 3 つの要素で構成されている。冒頭に [A] イヴァーノフによる作家プーシキンに関する解説があり、次に [B] 『ブガチョーフ叛乱史』の抜粋と小説『大尉の娘』（全文）、プーシキンの歴史作品に関するカローヴィンの論文が続き、最後に [C] 詩作品（「10月19日」「雲」「アンナ・ケルンに…」）の各解説と本文）が掲載されている。そして、単元末に各要素に関する問いや課題が付されている。こうした構成は他の単元にもおよそ共通している。

設けられた問いや課題は数が多く、この単元では【表 1】のように合計で 74 となっている。これは日本では考えられない細やかさであろう。主教材作品となる『大尉の娘』を分析的に読んでいく [B] の箇所には、74 のうち 56 が割り当てられている。問いや課題の内訳は、〈自己テスト〉〈朗読を聴きなさい〉〈読後の考察〉〈まとめに〉〈文学と他分野の芸術〉〈創造的課題〉という 6 種である。以下に、[B] に付されている問いと課題を順に抜粋提示し、それらの要求水準と内容を整理したい。

	問い・課題数
A	4
B	56
C	14
単元合計	74

【表 1】

## (3) 問いと課題から見える 8 年生に求められる読みの水準・内容

### ① 〈自己テスト〉 設問数：3

1. プーシキンの歴史主義はどこにありますか。『ブガチョーフ叛乱史』と『大尉の娘』にあるブガチョーフの蜂起についてのプーシキンのアプローチの違いは何ですか。

この〈自己テスト〉には、作品内容の分析的な読みに入る前に個々に整理しておくべき内容が示されている。18 世紀に起きたブガチョーフの乱を題材にして、プーシキンは『大尉の娘』と『ブガチョーフ叛乱史』という文種の異なる二つの文章を著しているが、上の問 1 では、題材の捉え方や描き方の差を大まかな把握することが要求されている。この問いに対する考察が、単元末の〈文学的探究の試み〉の問いを考える基盤となる。

この他、カローヴィンの論文を要約するとともに、論文の中で用いられている言葉をいくつか選び、それらを使用しながら『大尉の娘』を理解するための計画を立てる課題などが示されている。



## ② 〈朗読を聴きなさい〉 設問数：7

- あなたは、中編<sup>12)</sup>『大尉の娘』を読んで考察しました。今、ユリア・バシリエヴァの「道案内」の章の朗読を聴きました。どのようところに朗読者は注意を集中しましたか。どんなイントネーションやアクセントが、あなたに道案内者の性格を概念づけるために役に立ちましたか。

〈朗読を聴きなさい〉は、声という要素が作品の印象をどのように変え、流れている音楽がどのような効果をもたらしかといったことについて目を向けさせるものである。朗読者がどの場面でも語調やテンポをどのように変えたのか、そうした朗読がどのような印象を聴き手に与えるのかといったことについて確認したり、朗読の前後では主人公の行動に対する考えに変容があったかについて検討したりしていく。

## ③ 〈読後の考察〉 設問数：35

### 【第1章 近衛の軍曹】

- 「近衛の軍曹」と名付けられているこの章では、誰のことが語られていますか。グリニョフの家族はどんなですか。サヴェーリイチとボーブレは、彼の幼年時代にどんな影響を与えましたか。グリニョフを両親はどう勤務（軍役）に送り出しましたか。彼の父はどんな言葉で門出の祝福を与えましたか。

### 【第2章 道案内】

- この章はなぜ民謡から始まっているのですか。グリニョフとサヴェーリイチの会話から、二人をどのように性格づけていますか。「道」「大吹雪」について説明してください。グリニョフの夢は、その後の物語の展開にどのような意味を持っていますか。道案内者の姿形、彼と旅籠の主人との謎めいた会話を叙述しなさい。彼が言っている比喻には、どのような意味がありますか。
- グリニョフと將軍の会話は、どこが面白いのですか。グリニョフは將軍にどんなふう「ハリネズミの手袋をはめて接する・指導する」という表現の説明をしましたか。その俚語の本当の意味は何ですか。慣用句辞典で調べなさい。

### 【第4章 決闘】

- 彼ら（グリニョフとシヴァー布林）について、あなたは新たに何がわかりましたか。グリニョフはどんなふうに行動するようになりましたか。

### 【第7章 強襲】

- 少数の守備隊はどう行動しましたか。作者は、「人びとはどっと広場へ押し出した。私たちがそこへ追ってられて行った。」という句で何を言おうとしたのでしょうか。イヴァン・クージミチ大尉、イヴァン・イグナーチイチ副官、妻ヴァシリーサ・エゴロヴナはどのように死にましたか。

### 【第8章 招かぬ客】

- 叛徒たちが歌った俗謡は、どんな雰囲気、気分を醸し出していますか。

### 【第9章 別離】

- プガチョーフ軍のシヴァー布林、プガチョーフに勘定書を見せるサヴェーリイチ、マーシャとの別れをえがいたエピソードについて読み、解説しなさい。
- これらのエピソードについてテキストに近いように要約しなさい。

### 【第11章 叛徒の本陣】

- プガチョーフが語った鷲についてのおとぎ話はどんな意味があり、グリニョフはそれにどう反応しましたか。この会話にどんな意味がありますか。

### 【第14章 査問】

- 作者は主人公をどう考えていますか。自分の考えをテキストからの引用で立証しなさい。反乱、叛徒、グリニョフ、プガチョーフ、マーシャに関するプーシキンの捉え方についてどのようなことが言えますか。

〈読後の考察〉には、章毎に作品を読解する過程で検討していく内容が示されている。主教材として提示されている『大尉の娘』は14の章によって構成されているが、そのそれぞれに数個の問いが付されており、問いの合計は35になる。

問いには、「將軍からの手紙の後、要塞ではどのような準備が行われましたか。」「マーシャは何について書きましたか。」のように作品に描かれた内容を正確に拾い上げることを求めるものと「オレンブルグ県の状況は、これからペロゴールスク要塞に起こる事件について読者に示唆を与えていると思いますか。」「この会話にはどのような意味がありますか。」「どうしてプガチョーフはマーシャを許したのですか。」のような部分的な解釈に関するものとが混在している。情報の取り出しと解釈を丁寧に行う点は、日本の中学校の読みの授業と比較的よく似た傾向にあるといえる。異なるのは、登場人物の心情を明らかにするような問いが無いことである。各問いについて考えていく過程で人物の心情に着目することは当然あるだろうが、心情そのものは直接問われてはいない。

その他、この単元の〈読後の考察〉においては、エピソードの意味を尋ねたり、この先の主人公の運命を予想したりする問いなども織り込まれている。

#### ④ 〈まとめに〉 設問数：7

2. 1831年にはロシアでコレラ暴動<sup>43)</sup> が起こったことはよく知られています。そのことはプーシキンも知っていました。小説は18世紀の反乱について書かれています。プーシキン研究者たちは、過去のロシアに現在の源があることを指摘し、そこからプーシキンを悩ませた問題の答えを見つけるべきだと考えています。あなたは、この考えに賛成ですか。過去に現在の事柄の説明を見出すことは果たしてできるのでしょうか。
5. 第1章がどんなエピソードから始まっていたかを思い出してください。その作者に何を言いたいですか。『大尉の娘』のテーマと理念は何ですか。『大尉の娘』はどんな終末でしたか、そしてそれはどんな意味があるのですか。
7. 過酷な世紀の下、ヒューマンズムと人間的長所と人々の生き生きとした生活への敬意を秘めていると小説の主要テーマを文芸評論家たちは考えています。このような観点に、あなたは賛成ですか。グリニョフが貴族地主の名誉を守り、サヴェーリイチが農民の名誉を守り、人間性がすべての身分を結びつけることをプーシキンが望んだのだとみなしてもいいですか。『大尉の娘』の人物の、誰がいつ人間性(共感、同情、善、誠実)を露わにしていますか。

〈まとめに〉には、『大尉の娘』の全文を読み終えた後に、それを振り返って考察する内容が示されている。そのため、各登場人物とその関係を説明したり、作品の主題や理念を明らかにしたりするなど、各章を読む過程で細かく整理してきたことを総括する細かな解釈に関する問いが中心となっている。『大尉の娘』という題名が付されている理由についての問いもある。

また、文学研究者らの主張を評価し、それに対する自身の考えを表出することを求めるものもある。

#### ⑤ 〈文学と他の分野の芸術〉 設問数：1

挿画家のベヌーヤ、ソコロフ、ゲラシモフ、シュマリノフが、プーシキンの作品につけた挿画を見なさい。これらの挿絵に描かれている場面を本文の中から見つけなさい。挿絵は登場人物のどんな性格を特徴づけていますか。

〈文学と他の分野の芸術〉では芸術に関する横断的な問いが示される。この単位では挿絵に着目させる問いとなっている。日本の教育においても文章テキストと図表や写真などのテキストとを関連させて総合的に内容を理解するというところに鋭意目が向けられているが、〈朗読を聴きなさい〉においても、朗読者の語りや流れている音楽がもたらす影響を考察する問いが示されていたように、他の芸術と関連させて思考する視点は日本以上に充実していると見ることができる。

ロシアでは、文芸はもとより、演劇やダンス、朗読、音楽、映画などの芸術的な要素が日常の学校生活の中にごく自然に織り込まれており、それらを関連させた横断的な教育活動も盛んである。

#### ⑥ 〈創造的課題〉 設問数：1

この作品において、プーシキンはどのような永遠の問題をあげていますか。どこに現代的意味がありますか。このテーマについて小論文を書きなさい。

〈創造的課題〉は、考察したことを自分なりに文章にまとめさせるものである。こうした小論文（エッセー）を書かせる課題は、ロシアではよく見られる。

この単位では、プーシキンが掲げる永遠の問題を確定し、その現代的意味を示すことを求められているが、19世紀の作家の思考が、カビの生えた古ぼけたものなどでは決してなく、実は現代を生きる自分たちにも十分に価値があり、学ぶべきものであるという前提は、ブラギーニンの「教養であり、人生の指針となるものでもある。」という主張に通じている。

#### ⑦ 〈文学的探究の試み〉 設問数：2

1. 小説『大尉の娘』とプーシキンの『プガチョーフ叛乱史』抜粋を対比しなさい。あなたは、プーシキンによって書かれた『プガチョーフ叛乱史』の中のどのような事件が『大尉の娘』の内容に影響していると考えますか。

プガチョーフの人物像を小説と『プガチョーフ叛乱史』とで比較しなさい。どこが類似していて、どこが異なっていますか。プーシキンは、プガチョーフの蜂起や自分たちの首領を取り囲む人々、帝国軍将校たちを描いて何を強調したかったのだと思いますか。

有名な歴史家クリュチェフスキーは、『大尉の娘』が『プガチョーフ叛乱史』以上の歴史だと認めました。このことをあなたはどう理解しますか。クリュチェフスキーは何を言いたかったのでしょうか。この問題について詳しく述べなさい。

この〈文学的探究の試み〉においては、作品の読解を超えて、作家の捉え方を考察したり、第三者の論を評価したりすることが求められている。この単位では、プガチョーフの乱という歴史的な事実をプーシキンがどのように把握し、『大尉の娘』と『プガチョーフ叛乱史』という各文章の中でどのように描き分けたのか、そして二種類の文章に関する文学研究者の考えに対して自身の評価はどうかといったことを検討する。

#### (4) 高度な問いや課題を読み手に突きつける力をもった作品

前項において整理した6種類の問いや課題は、どれもが比較的高度・高負担に見える。日本の中学2年生に対して類似した要求がなされたとしても、大半の子どもは戸惑うばかりであろう。そもそもボリュームある作品を読み終えるだけの基礎体力すら身に付いていないかもしれない。

Просвещение社の教科書編集長のクラソフスカヤ（Светлана Красовская）は、論者との懇談の中で「高水準な質問かもしれないが、それを考えることを作品が要求している。（教科書に掲載されている）これらの作品を読むためには、どれも必要なものである。」と明言している。優れた作品は高次な考察ポイントを数多く抱えており、それらとしっかり対峙しなければ深い理解は得られないという指摘である。作品の質と考察の要求水準は連動しているという意味と換言できるであろう。重要な点は、ロシアでは、こうした高次な問いや高負担な課題に8年生の子どもたちが普段取り組んでいるということである。

クラソフスカヤは、続いて「そのため、指導する『文学』の教師は優秀でなければ務まらない。」とも述べている。教師自身が作品と粘り強く対峙してきた経験とその中で生み出された深まりのある読みをもち、そして、それらを教養や人生の指針として纏っている。ロシアの読書観に基づいたそうした状態が、「文学」の授業を行う上で重要だということであろう。参観した「文学」の授業の中には作品を読むときの糸口の一つとしてポリフォニーやカーニバルといったバフチンの用語や文学研究者の研究成果が登場しているものも別段珍しくなく、その是非は別として、そうした文学理論などに通じ、授業の中で使いこなせる力量も「文学」の教師たちは持っている。

### 4 読書の量と質の維持に向けた学校図書館と家庭の支援・協力

#### (1) 「文学」教師や学校司書が求める課外の読書

学校教育の影響下で子どもたちが読むことになるのは、先述のリストに並んだ160あまりの作品に留まらない。

ロシア連邦教育省は、3か月に亘る夏季休業中の課題図書を学年毎に示しており、それらを読むことも推奨している。例えば、「8年生のための夏の文学作品リスト」には、スタンダードの区分に従って推奨作品群が提示されている。

また、学校司書と「文学」の教師が連携して、1年間で読むべき課題図書リストを設け、子どもたちに読書を課しているシュコーラも多い。【表2】は、モスクワ市の460番校において授業とは別に課されている読書課題に関するマトリックスである。表には課題図書の作品名と子どもの名前が示され、読了した作品については「+」の印でチェックされている。このシュコーラでは、「文学」の授業において読む作品とは別に、アンデルセンの『人魚姫』のようなお伽噺から、スチーブンスンの『宝島』やデフォーの『ロビンソン・クルーソー』のような外国の古典的名作、プーシキンの詩、ゴーゴリやトルストイ、ツルゲーネフなどのロシア小説まで多様な40作品が指定されている。スタンダードの必読リストに並んでいた作品と類似した分





生活や人生を豊かにするものとして機能していく。授業での読みの経験の延長線上に日常読書が位置付いており、分析的思考の経験を必要とする読書が常態化しているということである。読書行為と読解経験とを意識的に切り離そうとする日本の中学生の意識<sup>14)</sup>とは逆のベクトルがロシアにおいては重視されている。

読解と読書の一体化を引き出す土台には、ロシア版洗礼本をスタンダード上にリスト化し、それを確実に子どもたちに届けていこうとする連邦教育省のリーダーシップがある。そして、文学作品を読むことが教養であり、人生の指針であるという社会全体に満たされたロシア的読書観もある。こうした仕組みの中でロシアの子どもたちの読書の量と質の水準が保たれており、特に「読書対象」「読み方」「読書観」という質的な側面を構成する3要素に日本のような崩れ<sup>15)</sup>は見られない。「文学」を核として読解と読書を往還するロシアの教育は、量的な改善に成功しつつも、質的には良書に誘うソフト面の取り組みと子どもの自主性に頼り、手詰まり感のある日本の読書推進活動に少なからぬ示唆を与えるものとなっている。

しかし、難解な作品とそこに内包される高次な問いが子どもたちの実態から外れているのではないかという懸念は拭えない。特に、身に付けた分析的思考力<sup>16)</sup>を日常読書において実際に活用できているかという点については、さらなる調査と分析が必要である。また、必読図書という絶対的な価値が偏見を生む危険性も無視できない。例えば現代作家の作品はロシアにおいても広く読まれている。しかし、人気作家ドンツォヴァを例に挙げると、社会に蔓延する「低次な読み物だ」「読者層は教育レベルが低い」という棘のある認識が、ライトな彼女の作品を表立って読むことが憚られる状況を作り出している。質的水準を維持しながらも、子どもたちの読書実態をどう考慮し、選書の自由をどう確保していくべきかについては検討しなければならない。今後の課題としたい。

本研究はJSPS 科研費 JP17K04759の助成を受けたものである。

なお、研究遂行にあたり、各種資料の提供と解説を国立研究大学高等経済学院附属学校の Анастасия Тулякова 博士から、各種翻訳と研究上の助言・示唆をロシアでの教員経験をもつ金倉孝子氏から頂いた。深く感謝申し上げる。

## 引用・注釈

- 1) 折川司「読書量・不読率の改善の陰で低下する中学生読書の質」『言語表現研究』第35号, 2019, pp11-24
- 2) 同上
- 3) 就学前教育を提供しているシュコーラも多い。
- 4) 示されている作家・作品の数が多いので原典の体裁を若干崩して掲載する。
- 5) 越谷和子「時代を超えて読まれる本——洗礼本」『学校読書調査25年—あすの読書教育を考える—』毎日新聞社, 1980, pp10-26
- 6) ロシア革命後に生まれたものについては「ソヴィエト文学」と呼ぶべきかもしれないが、小学館『日本国語大辞典』第二版の解説に従い、本論では「ロシア文



学」で統一する。

- 7) ゴーゴリ『外套・鼻』岩波書店, 2006, 改版第1刷による。作品のボリュームを感覚的に掴むため, 邦訳文庫のページ概数を提示する。以下, 10) まで岩波文庫による。版によってポイント数等の違いがあるため正確な比較はできない。
- 8) ガルシン『あかい花 他四編』岩波書店, 1988, 第46刷による。
- 9) プーシキン『大尉の娘』岩波書店, 1989, 第55刷による。
- 10) 魯迅『阿Q正伝・狂人日記 他十二編 (呐喊)』岩波書店, 1983, 第35刷による。因みに, 越谷和子が昭和期の洗札本の一つとして示した漱石の『坊っちゃん』岩波書店, 1988, 第75刷は135ページである。
- 11) Просвещение 社では, プーシキンの詩作品は7年生において中心的に取り上げられている。8年生ではプーシキンの小説に軸足を置いており, それは56というBの設問数からも窺える。
- 12) 長編, 中編の別は原典記載のままとしている。リスト内も同じ。
- 13) 1831年にコレラが流行し, 病人を強制的に隔離したり, 交通を制限したりする政府に対して, この疫病はわざと医師や官僚が仕掛けたものだという噂が流れ, 各地で武装暴動が起こった。
- 14) 折川司, 前掲書, pp21-22
- 15) 折川司, 前掲書, p22
- 16) PISA2015の調査報告は, ロシアの子どもたちの読解力がそれほど優れているわけではないことを伝えている。例えば, 習熟度レベル上位層(5及び6以上)の割合はそれぞれ5.9と0.8で, OECD平均の7.2と1.1よりも低い。また平均得点495もOECD平均とほぼ同じであり, 日本の516と比較してもやや見劣りする。この主因は他民族国家としての教育的困難さにあると推測される。

## 参考文献

- 大澤聡『教養主義のリハビリテーション』筑摩選書, 2018  
 関啓子『多民族社会を生きる～転換期ロシアの人間形成～』新読書社, 2002  
 阿部軍治『ソ連崩壊と文学』彩流社, 1998  
 野中進 他『ロシア文化の方舟』東洋書店, 2011  
 大野斉子『メディアと文学 ゴーゴリが古典になるまで』群像社, 2017  
 立田慶裕『読書教育への招待』東洋館出版社, 2010  
 プーシキン『プガチョーフ叛乱史』現代思潮社, 1971

(おりかわ つかさ・金沢大学)

